わが俳諧修業

芥川龍之介

小学校時代。——尋常四年の時に始めて十七字を並べて見る。「落葉焚(た)いて葉守(はも)りの神を見し夜(よ)かな」。鏡花(きやうくわ)の小説など読みゐたれば、その羅曼(ロマン)主義を学びたるなるべし。

中学時代。——「獺祭書屋俳話(だつさいしよをくはいわ)」や「子規随筆(しきずゐひつ)」などは読みたれど、句作は殆(ほとん)どしたることなし。

高等学校時代。——同級に久米正雄(くめまさを)あり。三汀(さんてい)と号し、朱鞘(しゆざや)派の俳人なり。三汀及びその仲間の仕事は詩に於ける北原白秋(きたはらはくしう)氏の如く、俳諧にアムプレシヨニス

ムの手法を用ひしものなれば、面白がりて読みしものなり。この時代にも句作は殆(ほとん)どせず。

大学時代。――略(ほ)ぼ前時代と同様なり。

教師時代。――海軍機関学校の教官となり、高浜(たかはま)先生と同じ鎌倉に住みたれば、ふと句作をして見る気になり、十句ばかり玉斧(ぎょくふ)を乞(こ)ひし所、「ホトトギス」に二句御採用になる。その後(ご)引きつづき、二三句づつ「ホトトギス」に載りしものなり。但しその頃(ころ)も既に多少の文名ありしかば、十句中二三句づつ雑詠に載(の)るは

虚子（きよし）先生の御会釈（ごゑしやく）ならんと思ひ、少々尻こそばゆく感ぜしことを忘れず。

作家時代。——東京に帰りし後（のち）は小沢碧童（をざはへきどう）氏の鉗鎚（けんつゐ）を受くること一方（ひとかた）ならず。その他一游亭（いちいうてい）、折柴（せつさい）、古原艸等（こげんさうら）にも恩を受け、おかげさまにて幾分か明（めい）を加へたる心地なり、尤（もつと）も新傾向の句は二三句しか作らず。つらつら按（あん）ずるにわが俳諧修業は「ホトトギス」の厄介にもなれば、「海紅（かいこう）」の世話にもなり、宛然（ゑんぜん）たる五目流（ごもくりう）の早じこみと言ふべし。そこへ勝峯晋風（かつみねしんぷう）氏をも知るやうになり、七部集（しちぶしふ）なども覗（のぞ）きたれば、愈（いよいよ） 鵺（ぬえ）の

如しと言はざるべからず。今日は唯一游亭、魚眠洞等と閑に俳諧を愛するのみ。俳壇のことなどはとんと知らず。又格別知らんとも思はず。たまに短尺など送つて句を書けと云ふ人あれど、短尺だけ恬然ととりつ離しにして未だ嘗て書いたことなし。この俳壇の門外漢たることだけは今後も永久に変らざらん乎。次手を以て前掲の諸家の外にも、碧梧桐、鬼城、蛇笏、天郎、白峯等の諸家の句にも恩を受けたることを記しおかん。白峯と言ふは「ホトトギス」にやはり二三句づつ載りし人なり。

（大正十三年）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行
1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：浅原庸子
2007年4月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。